
真・恋姫無双～歩みを止めて～

絶体絶命人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双〜歩みを止めて〜

【Nコード】

N5015G

【作者名】

絶体絶命人間

【あらすじ】

三国の戦乱が終結し、愛する妻と子供達と平和な時間を過ごす北郷一刀。しかし、彼は自身を蝕む病魔に冒されてしまい…。

（前書き）

この作品はハッピーエンドではございません。

また、時間軸としては前作の短編からの続編に当たりますが、前作をお読みにならずとも問題ございません。

興味がございましたらそちらの方もどうぞ。

――何故。

――何故、気付かなかったのか。

――何故、気付かなかったのか。

それは、いつか流した涙の日から更に数年経った頃の話。

「……どうしたのじゃ、一刀？」

「……ううん、何でもない」

城壁に佇む一刀は、真横に立つ祭の号令によって自由自在に変化する部隊の動きを見つめながら首を横に振る。

一刀に訪れた一瞬の眩暈。

それは身体を揺らし、僅かに足元をふらつかせたのだが…。

――いや、単なる疲労から来るものだろう。

おまけに今日は真夏日。

一刀だけでなく、城壁の下で動き回る部隊の皆々の表情もどこかぎこちない。

恐らく、気温だけで言えば三十度を超えているのだろう。

会う人々が皆、この暑さを話題に上げてくるのだから。

一刀の隣で声を張り上げる祭の横顔も火照っており、流れる汗が夏だという事を照明している。

おかげで見学を強要…いや、願い出た一刀も、足が地に着いていないような感覚に見舞われていた。

「……………よし、今日はこれまで！」

祭の最後の号令が演習場の皆に届くと、陽光を直接浴びたくないのか…。

部隊の面々はせっせと足を動かし、挨拶もそこにその場を後にする。

「まったく、ひょう子どもが…情けないのう」

「いや、この暑さなんだから仕方のない事だと思う…」

「それはそうじゃが、そこを着いて敵がやってこないとも限らんじやろう」

祭は自身の顎に伝う汗を右手で拭いつつ左手を腰にやる。

…いつものポーズだ。

やれやれといった様子で首を振り、新人達の暑さへの耐性を鍛えなければならぬとその場で力説し始める。

だが、いつまでも炎天下に晒されてはこちらが日射病で倒れてしまう。

一刀の纏っている服はフランチエスカの制服であり、夏用ではない。

一応上着は脱いでワイシャツ姿で佇んでいるものの、それは慰め程度にしかない。

「さ、祭さん。一旦城内に戻ろう？」

「む…」

「いや、まだしばらくは暑いだろうし…」

「一刀は相変わらず暑さに弱いのか」

「はは、ごめん…」

時刻は三時を回った頃だろうか…。

じりじりと照りつける太陽は、降りる方法を忘れたかのように頭上に浮かんでいる。

いい加減西の彼方に飛んでいってくれないものが、と愚痴ったところで涼しくなるわけでもなし。

調練が終わった事に安堵しつつ祭の背中をぐいぐいと押して、その場を後にする。

——まだ、呉が真夏だった頃の話である。

次に訪れたのは秋の深夜…政務の最中に。

執務室の椅子に腰掛けて、昼間から目の前に山積みされた書類を一人で片付けているときの事であった。

「——っ」

ぐにやり…という表現が適切だろうか。

頭を襲った謎の眩暈は、視界を揺らした直後に全身に脱力感を生じさせる。

そのせいで右手に持っていた筆が机の上を転がり、床に無機質な音を立てて落ちてしまう。

（ヤバ…）

同じ感覚を味わったのは二度目。

一度目と同様で瞬時に身体が元に戻る事はなく、十秒以上脱力感が身体を襲い続ける。

グラグラと、椅子に腰掛けたまま頭を揺らす一刀の姿は端から見れば滑稽極まりないが、本人は真剣そのもの。

何とか両肘を机についてその場をやり過ごし、全身に力が戻るのを待つ。

「……………、ふう……………」

秒、という単位を超えて、今度は一分。

体感では何十分にも感じられたが、実際のところはその程度だろう。

一刀は、身体に力が戻った直後に大きく息を吐き、頭を左右に軽く振る。

「…何だよ、これ？」

何なのだろうか、この感覚は。

疲労が蓄積された影響か、それとも別の要因が存在するのか。

一刀は医学に関しての知識を持たないので、今回の事に関して対処する方法は何ら思い浮かばない。

せいぜい、滋養強壯の薬を医者からもらって飲む位しか…今の一刀には思いつかなかった。

結局、その日は書類が片付かず、明朝まで奮闘する事になってしまった。

そのせいで、一刀は医者に見てもらう事を忘れてしまっていたのだった。

雪の降り積もる中庭に、皆が見つめる先で高速を体現した二つの影が交差する。

一つは、黄金の額当てを巻いた長髪の女性。

一つは、相手の女性よりも短い黒髪をツインテールにした少女。

互いに持っているのは、刀身で一メートル以上もある大太刀である。

一人目の女性は周泰、真名を明命という。

もう一人の女性…いや、少女の名は周召^{しゅうしやう}。

一刀と明命の娘にして、姉妹の中でも今のところ最も戦闘に長けている存在である。

とはいうものの、やはり十にも満たぬ子供が歴戦の武将である明命には敵わない。

しんと降り積もる雪の空に金属音を響かせ、後方数メートルの地上に大太刀を弾かれてしまう。

「…参りました」

「はい、では一旦休憩にしましょう」

弾かれた直後、神速の勢いで周召の喉元に切っ先を向けると、周召

は両手を顔の横まで上げて降参の意を示す。

当然といえば当然か。

居合いの速度で明命と対峙できる人間など、そうはいない。

甘寧…思春が相手だろうと、猫の邪魔さえなければ勝率は五分五分といったところだろう。

「更にできるようになったな、明命」

「いえ、私もまだまだ精進が足りません」

六角楼と呼ばれる離れのような建物の屋根の下で観戦していた思春が、一旦戻ってきた明命に声を掛ける。

しかし、明命もまた、武を極めようとする者。

娘を打ち負かしたくらいで胸を張っていても雪蓮に笑われよう。

「でも、やっぱり明命の子供ね。動きもそつくりよ、周召」

「うむ、周召も幼いながらよくここまで腕を上げたものじゃ」

「同感ですね」。周召ちゃんもしかしたら黄柄ちゃんより実力は上かもしれません」

「そ、そうでしょうか？ ととさまはどう思われますか…？」

横にいる周召は、周囲の褒め言葉に嬉しくなり、はにかみながら後頭部を掻いてしまう。

素直に言葉を受け止められるのは、周？がまだ子供だからだろう。

しかし、まだ何も感想を述べられていない父親からの言葉が欲しかったのか。

椅子の端に腰掛けて、雪の空をぼんやりと見つめている一刀に声を掛ける。

「……………」

「…一刀？」

「……………」

「おい、一刀！」

ぼうつとしたまま周召の問いかけに答えない一刀に、周囲の皆が怪訝な表情を浮かべる。

隣に腰掛ける蓮華の声すら届いていないのか、一刀はただじっと降りしきる雪の空に視線を向けている。

——いや、違う。

——今の一刀の瞳に、光は見えなかった。

流石に何かおかしいと気が付き、思春が一刀の肩を力強く掴んで揺らす。

そこでようやく我に返ったらしく、一刀はハツとした表情を浮かべて周囲を見渡す。

「え、えつと、ごめん。何だっけ？」

「貴様…娘の問いかけに答えてやれんのかっ」

「ととさま…」

「え？…あ、ごめん！ 周？、途中まで見てただけど…」

ここで嘘をつくメリットなどないだろう。

いや、恐らく嘘をつくという事を思いつかなかったのだろう。

慌てた様子で頭を下げると、周囲に溜息が広がり、話題の中心であった周召の表情が暗くなる。

「ととさまが見てくれなかった…」

「まったく、娘より雪を選ぶとは何だ…」

「ホントごめん！」

席から立ち上がって娘に勢いよく頭を下げる姿は、本当に天の御使
いなのだろうか。

いや、それこそが北郷一刀という人間である。

立場に甘えるでもなく、現実には立ち向かったからこそ今の一刀が存
在するわけで。

自分の非を受け入れられないほど狭量な人物であったならば、この
ような場所にいられまい。

「…なら、次はちゃんと見ていてくださいね」

「うん、約束する」

目の前にやってきた娘と指きりげんまんを交わして、その場を何と
か切り抜ける。

明命は一刀が疲れている事を知っていてか、苦笑を向けるのみで文
句を口にする事はなかった。

「……………一刀、ここにいたのね」

「…蓮華？」

その日の夜。

一刀は椅子に腰掛けたまま、しんと降りしきる雪の空を昼間と同じようにぼんやりとした目つきで見つめていた。

そんな一刀の元に現れたのは、薄紅色の髪を持った女性…蓮華である。

首を横に動かして視線を向けると、蓮華はどこか暗い表情で一刀の隣に腰掛ける。

「…一刀」

「……………何？」

蓮華から視線を外し、改めて雪の降る夜空に視線を向ける。

星一つない空は、雲のせいで夜にも関わらず白みがかった。

風もなく、音もなく、ただ降り積もるだけの世界に、二人は飲み込まれていた。

蓮華も一刀と同じように夜空を見上げ、同じものを見つめながら口を開く。

「一刀も、なのね」

「――」

蓮華の言葉はストレートだった。

それゆえか、一刀も一瞬身を震わせて、虚ろに近い表情が硬さを帯びる。

それを感じ取ったのか、蓮華も両手の指を絡ませながら、しかし空から視線を外す事無く続ける。

「…何だか、一刀の態度が…冥琳の時と同じような感じがしたの」

「同じ？」

「ええ。冥琳も病を患ってから、私達に隠し続けたけど…」

「……………隠せていなかったな」

蓮華は冥琳の異常に気が付いていた。

気が付いていながら、彼女のやりたいようにやらせたのだ。

それは、残り少ない時間を、雪蓮の想いに一番理解を示していた冥琳を思つてのことだった。

「…あと、どのくらいわかる？」

「持つて半年、くらいかな」

「そう…」

「発作の周期が早まつてきてるから…あまり、見つからずにいる自信はないよ。」

俺は冥琳みたいに演技が上手いわけでもないんだから…」

眩暈自体は以前から感じていたものだ。

だが、それが単なる疲労によるものだと決め付けていたのが失敗だろう。

俯き、瞳を閉じた一刀の横顔には呉の中枢を担う者としての力強さなど微塵も感じられない。

雪のような白みを帯びている横顔が、殊更に一刀の体調を証明して

いる。

「姉様も、冥琳も…一刀まで逝っちゃうのね」

「ごめん、蓮華…俺としても…もう少し長生きしたかったんだけどなあ」

「……………まったくよ。呉に天の血を…もっと入れる役目があるのに」

「そうだな…」

「…それに、昼間あの場所にいた皆には気付かれちゃったわよ、絶対」

「だろう、な…」

自分でも、と思う。

今日の昼間の件で気付かないのは子供達くらいだ。

恐らく、一刀にとって妻と呼ぶべき人達は、皆一刀の身に異常があると直感しただろう。

膝頭に肘をつく一刀は、蓮華のどこか冗談じみた言葉に苦笑を浮かべながら弱弱しく頷き返す。

以前の蓮華ならば、ここで泣きながら一刀を責め立てたりしたかもしれない。

だが、母となつて強さの意味を知つた蓮華は、一刀に辛く当たつたりなどしなかつた。

「…ごめんな」

「いいのよ」

「でも、俺は死にたくない」

「それは誰だつて同じよ。一刀は特に…争いとは無縁な、普通の人間だつたのだから…」

言いつつ、蓮華は肩に感じた固い感触に顔を向ける。

直後、鼻先に感じたむず痒さは一刀の髪が触れているせいだろう。

「…少し、眠つていい？」

「ええ、膝枕にしたほうがいいかしら？」

「いや…今は、このままでいい」

蚊の鳴くような声で問いかける一刀の身体には、まるで力が入っていないかつた。

紡がれる言葉も同様に、風前の灯という言葉がこれほど似合うだろうかと言わんばかりに弱い。

それに蓮華の瞳の奥が震えるものの、何とか堪え、一刀と同様に弱く返事をする。

そうして、一刀は蓮華の返事にようやく微笑を見せて、夜空を見上げていた瞳を閉じるのであった。

「ふう…」

「今はゆっくり休みなさい、一刀…」

僅か数年間だが、大陸を英雄達と共に駆け抜けた男は。

英雄の家族であり、また、彼と共に在った女性の横で。

——少しばかり、羽を休めるのであった。

< 完 >

（後書き）

ども、絶体絶命人間です。

今回は病に冒された一刀というわけで、とてもハッピーではございません。

命を取り扱うというのは死生観を養うのには最適でしょうが、同時に話の内容が薄っぺらくなってしまうのが問題で、その部分もまだまだ鍛える必要があるなと考えさせられた作品でした。

では、また別の作品でお会いしましょう。

追記 周召の「召」は、本来ならば別の漢字なのですが、携帯の場
合表示されない可能性があるなので簡単なものに変更しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5015g/>

真・恋姫無双～歩みを止めて～

2010年10月10日04時10分発行